

コロナ禍のオンライン授業への移行に対する英語教員の対応と英語の授業について

教養教育センター助教 たきなみ 滝波 わかこ 稚子

1. はじめに

新型コロナウイルスの影響により令和2年度開始直前に前期はオンラインで授業を実施することが決まった。しかしその時点でオンライン授業の経験がある教員はおらず、それぞれの教員を支援する体制を整える必要があった。そのような課題に教育センター（現教養教育センター）外国語部門に所属する専任英語教員がどのように組織的に対応したか、以下に述べる。また英語オンライン授業の成果と課題についても簡潔に述べる。

2. オンライン授業の実施に対する組織的な対応

それぞれの教員を支援するために専任教員が行ったことを前期開始前、学期中、前期終了後ごとに示す。最初に専任教員が教授法や教材等について調査を行い、オンライン会議ツールの Zoom を使いライブ形式のオンライン授業を実施することにした。Zoom を選んだ理由は、実践的な英語運用能力の向上を重要な到達目標の一つとする英語の授業においてペアワークやグループワークは必須であり、Zoom を使うことによりそのようなアクティブラーニングを実施することが可能だったからである。また鳥取大学の e ラーニングシステムである manaba を使った出欠確認や定期試験の実施を推奨することにした。

次に専任教員と非常勤講師を交えて Zoom と manaba の使い方に関する研修を行った。この研修では、専任教員が Zoom のアカウント作成や設定、ミーティングのスケジューリング方法、授業の始め方と終わり方、スライドや音声の共有方法、ペアワークやグループワークのためのブレイクアウトルーム機能の使い方といったオンライン授業をするうえで最低限必要なことについて説明をした。また、各自が実際に Zoom を使ってグループワーク等を体験した。さらに受講者リストのダウンロードの仕方や、メッセージの作成・投稿方法、ファイルのアップロードの仕方等、manaba の基本操作に関する説明も行った。

オンライン授業が手探りで始まり数週間ほど経ち、各教員が中間試験の準備を始めるころ、専任教員と非常勤講師を対象に再び研修を行った。この研修では manaba を使いテストを作成する方法や、manaba と Zoom を使いリスニングテストを行う方法について実地に説明をして、その後各自が試しにテストを作成し Zoom で音声を共有しながらテストを実施し合った。さらに試験前にオンラインテストに備えるためにできることや、試験中にカンニング行為を防ぐためにできることについて提案があった。

トラブルが発生した際には技術的なサポートが随時与えられ、大きな問題なく前期が終

了した。その直後に専任教員と非常勤講師を対象に、オンライン授業の利点や問題点など各自が感じたことについて調査をするためアンケートを実施した（[1]）。そして夏休み中に専任教員と非常勤講師が集まり、アンケートを集計し分析した結果について報告があり、さらにオンライン授業で実践したことについて教員間で情報交換をした。

3. オンライン授業の成果と課題

次に前述の教員を対象としたアンケート調査の結果から明らかになったオンライン授業の成果と課題について述べる（[1]）。まずオンライン授業の成果として挙げられるのは、コースコーディネーター体制が上手く機能し、コロナ禍におけるオンライン授業という緊急事態に迅速かつ組織的に対応できたことである。例えばオンライン授業への移行が決定してから前期の授業開始まで時間があまりない中、10日間程で専任教員が教授法や教材等についての調査を行い、非常勤講師を対象に Zoom と manaba の使い方に関する研修を実施した。その研修について参加した教員全員がオンライン授業をするうえで役に立ったと肯定的に評価している。また manaba に関してオンライン授業を通して多くの教員がその有用性を理解できた。コロナ以前に授業で manaba を使ったことがある教員はいなかったが、ポストコロナの授業において manaba のアンケートや小テスト等を引き続き活用することを考えている教員は少なくない。

学生の授業内容の理解や授業の双方向性に関しては肯定的な評価と否定的な評価が入り交じっている。学生の授業内容の理解について、7割近くの教員が学生は授業内容をよく理解していたと感じた一方で、4分の1の教員はあまり確信が持てず、1名は全くそのように感じなかった。授業の双方向性については、およそ半分の教員が教員と学生の間のやりとりは十分にあったと感じた一方で、残りの教員はそのように感じなかった。また学生同士のペアワークが上手く機能していたと感じた教員は4割弱にとどまり、半分近くの教員がそのように感じなかった。この原因は、個々の教員の努力と工夫で学生の理解度を確認したり学生とやりとりをすることができたのに比べ、ブレイクアウトルームにおけるペアワークは教員が管理することができず、ペアワークが上手く機能するかどうかは個々の学生のモチベーションと自制心にかかっていたためだと考えられる。

ここで授業内容の理解や授業の双方向性について学生がどのように捉えていたかについて少し述べたい。令和3年度後期開始時に複数クラスの1年生と2年生を対象にアンケートを実施し、対面授業とオンライン授業（ライブ形式、オンデマンド型）における理解度や満足度を調査した（[2]）。その結果、対面授業とライブ形式のオンライン授業において、授業の理解度、教員と学生のやりとりの機会、学生同士のやりとりの機会の3点の評価に有意差は見られなかった。しかしペアワークやグループワークが上手く機能したかについての評価には有意な差が見られた。ここから、授業の理解度とやりとりの機会に関しては学生の方が教員よりも肯定的に捉えており、対面授業と同じくらいオンライン授業をよく理解することができ、対面授業と同じくらい担当教員またはクラスメイトとやりとりをする機会があったと思っている一方で、ペアワークの内容に関しては教員と同じくオンライン授業では対面授業ほどペアワークが上手く機能しなかったと感じていることが明らかに

なった。

授業に関してはある程度満足できる結果が得られたように思われるが、オンラインで定期試験を実施する方法については未だに課題が残っている。オンラインテストを行った教員ほぼ全員がテストはうまくいったと肯定的に評価しており、経験を積み技術的な問題はほぼなくなったと思われる。しかし学生が試験を受けている間、教員が十分に目をくばることができないため不正行為の防止という観点から課題が残っている。この点については引き続き調査と情報共有が必要である。

4. おわりに

オンライン授業への移行を通して、今回のような緊急事態に対応するうえで準備、振り返り、情報共有は重要であり、それらを効率的かつ効果的に行うためにチームワークは不可欠であることを再認識した。オンライン授業に関しては公正な試験の実施方法や効果的なペアワークのやり方といった未解決の課題があるが、今回得た知識や経験を活かし、今後のポストコロナの英語の授業がコロナ以前に戻るのではなく、コロナ以前よりも良くなるようにコースコーディネーターを中心に英語教員全員で協力し工夫していかなければならない。

参考文献

[1] Takinami, W., M. Kobayashi, and S. Leane. 2021. General Education English Live Online Lessons: Report. *Bulletin of Tottori University Education Centre*. 17. pp. 65-75.

[2] 小林昌博, 滝波稚子. 印刷中. 英語の授業形態と理解度・指導法に関するアンケート調査の結果報告—コロナ禍とポストコロナにおける授業形態の検討—. 「鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教養教育センター紀要」18